



○一人前の教師

「好きなように保育をして下さい。」たいていの人はまずこう言われて、一組を受持つことになる。何とはなしに不安、心配はあっても自分の責任において毎日の保育をする、ということは、かなり魅力のある仕事である。けれどもこの魅力は、やがて、その中にひそんでいた不平や不安を、それぞれ異った形であらわしてくるようになるようである。

すなわち組単位で何もかも進められる園においては、教師は思うような保育が出来るのであるが、しかしこのような園では、往々にして横のつながりが薄くなつてしまい、ひとりよがりになるので、よほど自己をしっかりもっていないと情性になりかねない。そしてふとしたきっかけや、反省のために、遂には他の組ばかりよく見えるようになったり、自分が不適当な保育をしているように思えたりするようになって、ますます不安が去らないということになるのである。

この反対に、組単位よりもむしろ園全体でやることの多いところにおいては、「好きなように保育をする」ということは、だいぶ制限される。専制的主任保育をおいでおれば、一そのことはいへんである。せっかく毎日の保育が束縛されないように心がけられてはいても、実際には教材にまで一

つひとつ干渉されることとなり、結果的には一人前に扱ってくれないのと全く等しいような状態になってしまふ。そしてこういうところでは、職員会議において一応は皆の意見を聞くかたちになつてはいるものの、結局は主任が自分の思う通り以外にはきめないのであるから、いわゆる「職員会議」なるものはなりたたないのと同じなのである。こういうようなことから、一人前の教師であるということが、いかにむずかしいものであるかを、しみじみ思わされるのである。

さてここで幼稚園の教員としての半年をふりかえてみると、とにかく無我夢中であつた状態から進んで、ようやくこの頃になつて子どもの姿を自分のものとしてとらえることが出来るようになったと思われるのである。と同時に、新任教師であるが故に気づくとこ

ろの、さまざまの問題や矛盾にもつき当てるようになった。温かな人間関係の中で、教師としての喜びを存分に受け入れている人、また、せまい保育室や遊園に、一ぱいの園児をかかえて、他の組の園児に迷惑がからぬように気を配り、一斉保育とも個人指導ともつかぬ保育にままならぬ日を送る人、あるいはまた、野外保育に大きな期待をかけている人、おしゃべりのために帰宅時間がおそくなるような不合理性に気づかぬ無神経をふしぎがっている人など、さまざまである。理屈ではわかつていても、実際には改良も建設もむずかしい問題が山積している。

以上は、新任半年の教師たちの話合いから拾った印象であるが、どうやらこれは、この頃の幼稚園教育の問題の、公約教的傾向をも示しているようである。